様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４５１０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５２０２６５

研究課題名（和文）中世歌題集成書類の生成と展開

研究課題名（英文）The formation and development of Compilations Kadai Shusei Documents in the Medieval Period

研究代表者
藏中　さやか（KURANAKA, Sayaka）

神戸女学院大学・文学部・教授

研究者番号：８０３０９４２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：平成20年度～22年度にかけておこなった科学研究費補助金基盤研究（C）による研究「中世歌題集成書類の基礎的考察」を承けて開始した本研究は、『明題部類抄』に代表される中世の歌題集成書類の相互関係について明らかにし、それらが近世に至る間にどのように変容、展開していくかを考究するとともに、歌題集成書類の史的な意義付けを試みたものである。対象本文をフルテキストデータ化することで、本文の比較検討や特定の組題の採録状況等の調査もあわせておこなったが、これによって歌題集成書類のうち、特に『明題部類抄』に連なるものについては、展開の実相が、一部、明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The present study, which has been carried out based on my previous study entitled "Study on Compilations of Kadai Shusei Documents in the Middle Ages" supported by Grant-in-Aid for Scientific Research (C) (2008-2010), clarified the relationships of Compilations of Kadai Shusei Documents, e.g., Meidai-Buruisyo, investigated how they changed and developed until the early modern times, and attempted to define a historical significance of Compilations of Kadai Shusei Documents. In addition, studies on comparison of their texts and on the selection situation of specific collection of themes were done by making the target texts into usable full-text data.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学　中世文学　和歌文学　歌題集成書　明題部類抄　増補和歌明題部類　尾崎雅嘉

１．研究開始当初の背景

本研究は平成２０年度～２２年度におこなった科学研究費補助金基盤研究(Ｃ)による研究(研究課題名：中世歌題集成書類の基礎的考察(課題番号 20520192）)の発展的継続を目指して開始した。

先行する研究であった「中世歌題集成書類の基礎的考察」は、中世中期から後期にかけて相当数が流布したと考えられる歌題集成書類の収集及びそれらの相互の関係や取材源の解明、各歌題集成書類の諸本分類、位置づけを明らかにすべく取り組んだもので、歌題集成書と、未整理のままになっている歌題集成書の一部や類題集、歌会等の題のみを列記した史料類を対象としておこなったものである。

これらの歌題集成書に関わる研究に先鞭をつけたのは井上宗雄氏である。同氏は「『類題鈔(明題抄)』について―歌題集成書の資料的価値―」(『国語と国文学』第 67 巻第 7 号平成 2 年)及び「『明題部類抄』をめぐって―中世成立の歌題集成書の考察―」(『鎌倉時代歌人伝の研究』風間書房　平成 9 年)において、各書の紹介や諸本分類等を示され、その資料性に注目すべきものとして歌題集成書を紹介しその研究価値を明示した。しかし、その後、本研究以外には同分野に関する積極的な研究はなされない状況が続き、本研究は井上氏の研究を継ぐ形で成果を収めた。

具体的には、歌題を集成する史料群の中には根幹史料を同じくすると考えられる複数の史料の存在を確認したことが挙げられる。例えば、佚書と考えられていた『袖中題鈔』が国立歴史博物館蔵『組題集成』①に含まれていることを明らかにするとともに、同類の書が複数存在することやその内容が近世に版行された『和歌組題集』の一部となっていること等を明示した。

上述のように、これまで、井上宗雄氏の研究を除いては特に取り上げられることのなかった歌題集成書及び歌題集成史料類の基礎的な考察は一定の成果をあげたものの、研究の進行に伴い、研究開始当初には、思い至っていなかった新たな視点からの切り込みや近世の歌題集成書への影響関係を考えることが必要であることが明らかになった。

周辺の研究業績に目を向けると、小川剛生氏『武士はなぜ歌を詠むか　鎌倉将軍から戦国大名まで』(角川叢書)、山本啓介氏『詠歌としての和歌　和歌会作法・字余り歌－付〈翻刻〉和歌会作法書』(新典社)、酒井茂幸氏『禁裏歌書の蔵書史的研究』(思文閣出版)、末柄豊氏「東京大学教養学部所蔵『飛鳥井家和歌関係資料』」(『東京大学史料編纂所研究紀要』19 号)等が相次いで報告され、歌題集成書に関する研究はこれらの成果と深く関連するものであると考えられた。

本研究課題は、基礎的な考察を終えた中世歌題集成書類の史的意義を示し、近世へどのように繋がっていくのか、を具体的に明らかすることを目指そうとしたものである。また個別の史料類が内包する本文の問題や伝本分類についてもその研究対象とし、歌題集成書類がどのように展開していったのかを考究するために開始されたものである。

２．研究の目的

中世歌題集成史料に記載される情報は、独立的、個別的な場合もあるが、別書でありながら共通する組題が同じ配列順で部分的に含まれる例や、配列を変えつつ共通内容を有しているもの等、相互の繋がりが想定される史料が存在する。これらを精査することで、各史料間の繋がりを明確にするとともに、根幹となった史料の存在を考えることが可能となる。本研究をおこなうことで、中世の歌題集成史料はどのように編まれ、そしてどのように近世へ継承されていくのか、という問題に迫りたい。すなわち、中世歌題集成書類の、生成過程と近世初期までの和歌史上の位置づけを明らかにし、各史料の相互関係を具体的に把握することと、これに関連して代表的な歌題集成書である『明題部類抄』の展開を追い、その周辺状況を明瞭にすることを目的としたい。

中世後期には、新生の武家歌人、地方歌人によって、和歌文学の世界に新たな地平が切り拓かれた。そして歌題集成書類が多く編まれ、書写された時期はまさにこれと重なる。これら歌題集成書類は、冷泉、飛鳥井という歌道家の歌道入門や伝授と密接な関係があったのではないだろうか。近世御会での出題者は、天皇もしくは冷泉、飛鳥井に限定され、近世に用いられた組題は、相当数が中世歌題集成書類に確認される。歌会や続歌の歌題はどのように選定されたのか、そもそも題者の資格とはいかなるものであったのか等、《出題の歴史》の中で中世歌題集成書類の果たした役割を考究したい。従前の研究では、歌題集成書は出題のための手引き書として発展をしてきたとされてきたが、実はそれだけではなく、地方歌人が台頭し歌道家(飛鳥井家、冷泉家）と関与する中で師弟関係を結ぶものとして用いられたという側面も有したものではないだろうか。

簡単にまとめると以下の通りである。

（１）中世歌題集成書類の生成過程とその展開を跡づける。

歌題集成書類の組成、内容から分類をおこない、それぞれの分類が基とした史料について考察を加え、中世歌題集成書類がどのような過程を経て成立し、継承されていくのかを解明する。具体的には『明題部類抄』を中心に据えて考えていきたい。

（２）異種多数の中世歌題集成書類が成立、流布した背景を考える。

『明題部類抄』以来、異種多数の歌題集成書が成立、流布したのはなぜか。武家歌人の台頭、歌道家(特に冷泉家）の関わり等、中世後期という時代性を念頭に考える。

（３）歌題集成書類を和歌史上に定位する。上記（１)・(２）の成果をもとに、近世へと繋がっていく歌題集成書類を和歌史の上に位置づけ、その意義を明確にする。

３．研究の方法

（１）研究対象とする史料本文をフルテキストデータ化し、個別の歌題集成書の記載内容を相互に比較検討した。
　入力書目は以下の通り。
　中世以降の歌題集成書類…題林(陽明文庫蔵)、明題集抜書(島原松平文庫蔵)、和歌題林集(書陵部蔵)、明題抄(青山会文庫蔵)、明題集(国立歴史民族博物館蔵)、組題（伊達文庫蔵)、訓題抄（鶴舞図書館）等
　近世の版本…増補和歌題林抄、掌中和歌明題集、掌中和歌題林抄、増補和歌明題部類(以上、架蔵)等
　なお、入力に際しては、検索の便宜をはかるため、一部、字体の統一や、ルビ、一、二点の削除などの加工を施しており、必ずしも原本通りのデータとはなっていない。しかし、一定の法則に従った処理をしており、利用上の問題点は発生していない。

（２）上記データを活用することによって、配列や構成、特定組題の所収状況から個々の史料の相互関係を明確化していく作業をおこなった。『新編国歌大観 CD-ROM 版』『私家集大成 CD-ROM 版』を利用し、歌題や詠作日次から詠作の場や詠作者の特定を試み、詠作の「場」と歌題との関連性を個別に検討した他、歌集や古記録類の記述から、歌題集成書類に含まれる詠作機会の特定をおこない、順次、研究対象を近世初期にまで拡げていった。

（３）詠作機会に関する注記の豊富な尾崎雅嘉撰『増補和歌明題部類』から中世歌題集成書類に記載される歌題を検証した。古い時代から新しい時代へと通史的にみる従来の角度を変えた考察を試み、詠作機会、出題者名注記から成立の周辺を探った。作業の過程で、『増補和歌明題部類』の編纂、成立に関する新たな知見を得た。

以上が、全体にわたる研究方法である。個別の歌題集成書に特化した内容として、以下のものが挙げられる。

（４）『明題古今抄』の持つ高い資料性に注目した。従来、注目されてこなかった同書の記載内容を詳細に検討することで、後述のような新たな知見を得た。

（５）尾崎雅嘉撰『増補和歌明題部類』については、その本文を書籍の形で公表することを前提にして、雅嘉自身の複数の歌題集成書研究や関連事蹟を解明すべく、本文の翻刻や関連資料の閲覧を初めとする諸作業に従事した。

（６）入力データの確認作業を継続しつつ、歌題集成書類のグルーピングを進める研究進行過程では『明題部類抄』をその根幹に据えたが、特に同書の重要性に注目し、諸本の状況確認とその本文に関わる考察おこなった。

４．研究成果

　これまで詳論されることの少なかった歌題集成書を総体的に取り上げ、和歌文学史の中に定位するには、まず、基礎的な史料整理とそれらの相互関係の明確化が必要であった。本研究では、史料をフルテキストデータ化することでそれらの検討を容易におこなえるようにするとともに、中世から近世へと繋がりゆく歌題集成書の流れについて、俯瞰的に眺めることで、新たな視界を広げることができた。
　例えば、〈明題抄〉と関わる複数の書(『明題抄』『明題集』『明題集抜書』等)の分析からは〈明題抄〉の原拠史料の形態を想定することになり、その過程で『明題部類抄』という書物の重要性、後代への影響の大きさを再認識することとなった。よってさらに『明題部類抄』そのもの、そしてその周辺を丹念に検討したが、その結果は未紹介の一史料が同書を抄出するものであることを報告することに繋がった。当該史料は、催事名、詠作機会やその年次、出題者名を記した後で歌題を列記するという本来的な歌題集成書の書記形式に独自の変更を加えたもので、本研究で述べる歌題集成書類の展開の一事例に相当する。
　歌題集成書は、従来、出題手引書として使用されたと考えられてきたが、出題者という立場で、或いは催事毎の歌題組成の比較をしたいという学習者の視点をもって眺めた場合、従来的な催事別もしくは組題数別の書き方は、その要求に十分に応えうる書記形式として受けとめられなかったこともあったと考えられる。つまり、歌題集成書は、その享受や利用という観点から、新たな書記形式が編み出されることがあった。これは歌題集成書のもつ歌題リスト的な性格がもたらすものとも言えよう。当該史料の場合は、特に百首歌題に重点を置く採録をおこない、複数催事の歌題を同時比較するために必要な書記形態に改めたものであったと結論づけられた。
　また従来の歌題集成書研究の視野は増補の在り方や異本の発生に関する問題へと拡がる傾向があった。これはその資料性を重ん

じ、和歌史の隙間を埋める事蹟を歌題集成書類に求めようとするが故に生じたものであった。

本研究では『明題部類抄』については伝本そのものに立ち戻り、本文研究という視点から問題の解明をおこなった。

『明題部類抄』の諸本については、先行研究により大きく三類に分けられる。七巻本である一、二類本と、別本を総括する三類本という分類である。本研究ではこれらのうち書写者と伝来の上から注目される、陽明文庫本、細川永青文庫本、防府天満宮本を、各類の代表伝本として取り上げ、本文異同や欠脱の発生を注視しつつ考察を加え、その本文を比較検討した。陽明文庫本については欠脱、錯簡箇所、古態の残存箇所を明示し、また防府天満宮本の混態状況と本来の本文系統について言及を加えた。

平成２０～２２年度科学研究費補助金研究基盤研究（C）より継続的におこない最終的なまとめをとりおこなうこととなった『明題古今抄』に関する研究では、その原拠資料に注目した。所収される組題の多くが室町後期のものであり、その注記から後花園天皇と飛鳥井歌人による出題に重きを置いた歌題集成書であると考えられること、特に後花園院御集』との比較によって、同集の歌の詠作年次が特定される、五十首・三十首の歌題の全容が明らかになるといった点や現存三本のうち陽明本のみが増補部分を有する伝本であること等を学会誌にて報告した。

また『明題古今抄』に所収される歌題の多くが江戸後期の『増補和歌明題部類』（寛政 5 年 1793 序）に見えること等を端緒として、発展的に『増補和歌明題部類』をはじめとする尾崎雅嘉による一連の歌題集成書を研究の対象として扱い、寛政期の年譜をまとめ個別の書について論述する等、一定の成果を収めた。

『増補和歌明題部類』はこれまで版本を使用するしかなかったが訓点や一二点、読み仮名等も極力本文に忠実な形で活字にて提供すべく、本研究の成果物として書籍の形で出版し、研究上の便宜をはかった。これにより『増補和歌明題部類』が中世末から近世の和歌文学研究に資するものとして今後活用されるものと考えている。またこれに関連して、尾崎雅嘉の歌題への関心から編まれた書物について先行研究に導かれながら年次順に辿り、その内容を同書の解説に詳説した。

『増補和歌明題部類』はその外題から明らかな通り、『明題部類抄』の影響下に成ったものである。しかし、その配列、内容は『明題部類抄』とは異なり、単純な増補ではない。例えば、二十五首題、詩句題、経文題といった新たな区分が新設され、また百首題や五十首題、三十首題では多数の新たな組題を所収し、それぞれに、春夏秋冬各季と四季、恋、雑に部類し、おおよそ年代順に配列するといったことがおこなわれている。詠作機会注記には「冷泉家出題」「飛鳥井家出題」といった文言やその詠作年次が示され、最も新しい時期として明和八年八月の冷泉家当座会という催事が指摘できる。この他、尾崎雅嘉の歌題への関心の高さは、『増補和歌明題部類』以降に編纂される『掌中和歌題林抄』『掌中和歌明題集』等の複数の編纂物に現れている。これらのうち、本研究では『群書一覧』に記載される『類題證歌集』に特に着目し、同書が、尾崎雅嘉の実弟谷川于喬が『蘿月庵国書漫抄』の跋文で述べる『広類題集』と、多少の増補はあるかもしれないが、同一の書と見なされることを明らかにした。

以上、本研究では複数の視点からの成果が得られた。近世は言うなれば中世歌題集成書類の恩恵を蒙った時代である。しかしその実相はこれまで明らかにされてきていなかった。本研究は未開拓分野へのアプローチであり、歌題集成書類受容の史的変遷を捉え、個別の歌題集成書類を和歌史の流れの中に位置づけようとしたものであった。歌題集成書類を対象にする本研究は、文学性に乏しく地道な作業の積み重ねが必要なもので研究進行には時間がかかる。しかしその成果の一部は出版という形をとることで他研究者も使用可能な研究資料として提供することができた。

この他、同時期に遂行していた研究に関わる頓阿の歌集や宋雅百首等の定数歌についても歌題はすべてフルテキストデータの一端として今後活用できる形で整え、歌題集成書類に収録される歌題との相互関係については確認の対象とした。本研究によって得た手法を継続することで、今後、研究対象として関わる歌集類については歌題集成書類との接点を求めていくことができるであろう。

最後に歌題集成書類が要請された背景について述べておきたい。

歌題集成書類はこれまで出題の手引書という用途が強調されてきたが、題者の資格を与えるものと与えられるものという師弟関係を考察の中に持ち込むことで、新しい歌題集成書の役割が見えてくる。歌題集成書類と歌道家の関係を考察の視野に入れることで、新しい方向からの意義づけをおこなうことが可能となる。また『題会之庭訓』『冷泉家秘伝』『和歌条々』『和歌功能』等の歌題に関わる記述と照らすことも不可欠である。歌道家との繋がりから中世末期から近世の歌題集成書類の果たした役割を考察することが最後の課題になるが、この点を取り上げた本研究の成果の一部となる論考は現在執筆中であり、今年度中に活字として公表の見込みである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 藏中さやか「『明題部類抄』諸本系統に関する覚書―本文研究の視点から―」、神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』、査読無、第 62 巻第 1 号、pp1-12、2015.6.（予定）

② 藏中さやか「歌題集成書の展開―明題部類抄を抄出する一事例を通して―」、神戸女学院大学研究所『神戸女学院大学論集』、査読無、第 60 巻第 2 号、pp1-12、2013.

③ 藏中さやか「陽明文庫蔵宋雅百首に関する考察」、京都大学国語国文学会『国語国文』、査読有、第 82 巻第 11 号、pp15-31、2013.

④ 藏中さやか「頓阿日次家集(陽明文庫蔵)の検討」、和歌文学会『和歌文学研究』、査読有、第 105 号、pp24-37、2012.

⑤ 藏中さやか「歌題集成書『明題古今抄』の伝本・構成とその資料的価値」全国大学国語国文学会『文学・語学』、査読有、第 200 号、pp1-12、2011.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計１件）
① 藏中さやか、青簡舎、『翻刻　増補和歌明題部類―翻刻と解説―』、全 355 頁、2013.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
藏中　さやか（KURANAKA, Sayaka）
神戸女学院大学・文学部・教授
研究者番号：８０３０９４２６

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし